

2019 vol.44 春号 源流からのたより

ぽたいたい!

源流のひとしづく



CONTENTS

- ・ 事務局長コラム
- ・ 「源流学」®
- ・ 源流の主役たち
- ・ 広橋城
- ・ 川上村の巨樹・古木調査に寄せて
- ・ 源流学の森づくり



森と水の源流館



住所 奈良県吉野郡川上村宮の平
公益財団法人吉野川紀の川源流物語
TEL 0746・52・0888
FAX 0746・52・0388
URL <http://www.genryuu.or.jp>
E-mail morimizu@genryuu.or.jp

『川上宣言』とよむじりー そして、いれからも。

公益財団法人 吉野川紀の川源流物語 事務局長 尾上 忠大

何事につけ「平成最後の・・・」という言葉が添えられるときです。いま、平成最後の年度末を迎えるにあたり、何を書くべきか考えました。今年度は、あらためて『川上宣言』を見つめ直し、深く向き合う一年間だったので、その中から三つのことを書きます。

■ 『川上宣言』とESD ■

川上村の環境基本計画推進の位置づけで役場や公共機関・施設の職員を対象に毎年行う研修会で、講師を奈良教育大学次世代教員養成センター准教授の中澤静男先生にお願いしました。「ESDってなんですか？」というテーマでのお話の中で、次のように『川上宣言』に触れていただきました。

『川上宣言』は、ESDの教材として十分な価値を持っている。持続可能な社会づくりの構成概念の規範概念として「責任性」と「連携性」を、実態概念としての「多様性」と「相互性」を強く意識した宣言となっており、これを体験を通じて学ぶことは、ESDに他ならない。川上村長をはじめ聴講した一同にとって自信と勇気を得る内容でありました。

■ 小学校で『川上宣言』 ■

その研修会に初めて川上小学校の先生の姿がありました。その後も五年生担任の先生が、「森と水の源流館授業づくりセミナー」（詳細は本誌41号参照）にも全回参加。先生は川上村の「ダムカリー」を素材として、二つのコンクリートダムから「緑のダム」へと児童の意識をやり、森のことについて学習するという授業計画を作成し、実践されました。そしてその過程で、森を守る背景にある『川上宣言』にたどりつき、調べました。

児童たちは先生とともに役場の村長室を訪ねてインタビューも行ったそうです。十二月には、学習成果を児童たちが多くの村民の前で発表しました。またこの授業づくりの内容は、ESD授業として高く評価を受け、実践報告会などで他地域の先生へ発表を行って来ています。その中で川上小学校の先生から児童たちへの言葉が強く印象に残っています。

「先生はしっかりと準備をし、魂を込めて授業をするから、みんなも川上村を背負って立つような気持ちで、いっしょに勉強していきましょう」



授業づくりセミナー報告会の様子

■ 『川上宣言』企画特集（奈良新聞） ■

昨年末、筆者も協力し、奈良新聞全面において『川上宣言』をふりかえる特集記事を掲載。その中で、平成八年に『川上宣言』を執筆された現在早稲田大学名誉教授の宮口侗迪先生に『川上宣言』誕生の「ころ」と題した寄稿をいただきました。一文を紹介します。

川上村が水源地の村として、自然と共生する「川上宣言」を村是とされていることは、過疎化の進む奥地山村として極めて崇高な姿勢といえる。

山村には山村の価値がある。清らかな水が生まれる貴重な自然を持つ村が、水源地の村づくりを高らかに宣言しようという発想はまさに自然の価値の再認識の時代にふさわしいものであった。

「川上宣言」の実現に向けて着実に歩んでおられることにあらためて敬意を表したい。

新たな年号がはじまる今年、川上村は村制一三〇年を迎えます。これからも、いつも『川上宣言』に込められた意味やおもいをみんなで考えながら、自らが行動することを忘れず、途切れることのない時を刻んでいこうと思います。

奈良新聞 2018年12月26日

※ ESD = Education for Sustainable Development

前号からの続きで、「吉野林業」について、講演録の原稿から記したいと思う。

間

伐は、80〜百年の期間で皆伐期（一定範囲の樹木を一時に全部または大部分伐採する主伐の一種）と、長伐期（通常の主伐林齢の約2倍を超える林齢で主伐を行うこと）で計画しており、その間、10回行います。5〜10年間隔で1回、約20%前後の間伐を伐期まで繰り返します。伐期になると、9千本植栽した本数が、皆伐期には、haあたり920本ぐらいになっています。普通、伐期50〜60年ごろには、残存本数は千〜1200本で、3千本植えた国有林と同じような本数になっているのですが、その中味がまったく違うことにも注目してほしいと思います。

な

ぜ、吉野林業は、このような手間やお金のかかる施業をしていたのかという点、江戸時代から続く樽丸生産を目的に施業を行っていたからで、一時、吉野林業を樽丸林業と呼んだ時代もあったようです。吉野林業は密植し、多間伐を繰り返すことで年輪幅の狭い（1cmで8年輪）かつ均一な材となり、酒樽として非常に良い素材ということだけでなく、酒に風味を与えらるゝとして人気でした。

そ

の樽丸も1940年ごろには吉野林業の舞台から退き、代わって戦後の復興から住宅部材の需要が拡大し、柱角材が目され、原木市場が生まれました。素材・生産

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

70

年代に入ってから、材木の自由化が始まり、大都市は国産材から輸入材へと変化していったなかで、一般材の価格が伸び悩み、丸太の生産量は急減しました。その反面、吉野材の銘柄化することで造作材（建築内部の仕上げ材、取付材の総称）として生かされ、ヒノキの枝打ち材が無節柱材として付加価値の追求が始まった時期でもありました。

こ

うした需要側の変化が山側に与えた影響はとても大きく、柱角材時代にまるで忘れられていた最高級のスギ・ヒノキが再び脚光を浴び始めました。量より質を求める時代になり、吉野林業も樽丸時代に培った技術特製が再び意味をもつことになったのです。

80

年代は、集成材の化粧常板の需要が急速に拡大、ヒノキの集成材の柱が市場へ回り、続いてスギの造作材の集成材へと広がっていきました。このような集成材用単板の需

達ちゃんが語る

子どもたちに伝えたい「源流学」

⑱吉野林業
～その2～



要に適した山は国内でも限られた地域にしか存在せず、そこで吉野林業の密植、多間伐、長伐期施業により育てられた最高級材が重要視された時代でもありました。

こ

のように吉野林業は樽丸の時代から、柱角の時代、そして造作材、集成材の時代と移り変わってきたのです。90年代に入ると住宅建築の様式が多様化になり、需要が減少し、あわせて丸太価格も厳しさを増し、ブランド物の吉野杉もだんだん影が薄くなったのでした。

そ

て吉野林業のもう一つの特徴は、森林の所有形態が、ほかの町村と違う点です。川上村の森林面積2万5千haのうち、村内の人の所有面積が約3千haで約12%、村外所有者が2万1900haで約88%です。なぜこのようになったのかといいますと、もともとは村の人たちが所有していたのですが、元禄年間ごろより植林が始まったものの、地理的に奥地であるがゆえに、木材生産の利益も低く、生活の維持も困って、結局は村外の資本に依存するようになっていきました。

こ

のような外部資本の攻勢に対し、自らを守るため、土地の所有権と、使用収益権を分離する方法、す

なわち、借地林業制度が生まれたのです。これは立木一代限（99年）、定期年限一代限りといって、土地を貸して、相手方が木を植えてもらい、その手入れは村の人が行い、労賃をいただく。そして約束の年になると、皆伐してその売上金より、最初、約束した割合のお金をいただき、土地は元に戻るといったシステムで、今という分取制度でありました。現在は、この制度もほとんどなくなり、一部残っているだけです。

（次回につづく）



樽丸（たるまる）

※連載では、「聞き書き」でコミュニティライターの西久保智美が担当します。

15. ハシブトガラス *Corvus macrorhynchos* (留鳥)

ハシブトの「ハシ」はくちばしのこと、くちばしが大きいカラスという意味です。「カーカー」と体を押し出すような姿勢で鳴きます。よく似たハシボソガラスはお辞儀をするような姿勢で「ガーガー」と鳴きます。真夏の暑い日、口を開けて暑さをしのいでいるところを見ることがあります。人を襲うというニュースを聞くことがありますが、近くに巣があったり、ヒナがいたりして、近づかないでほしいと言っているのかもしれない。



16. セグロセキレイ *Motacilla grandis* (留鳥)

スズメより少し大きい。黒い顔に白い線がよく目立つセキレイです。水辺の近くに棲息し、あまり離れることはありません。長い尾を上下に振るところから、「石敲き」とも呼ばれています。日本の特産種と言われていましたが、最近朝鮮半島、台湾の一部にも棲息していることがわかりました。よく似た鳥に顔が白く目のところに黒い線が通っているハクセキレイがいます。ハクセキレイは、ユーラシア大陸に広く分布しています。



17. モズ *Lanius bucephalus* (留鳥)

スズメより少し大きい。秋に「キーンキーンキーンキーンキーン」と「高鳴き」をします。「キュン、キュン」と鳴いたり、ほかの鳥に似た声を出したりするので、「百舌鳥」とも言われています。アンテナや電線に止まり、尾をゆっくりと回して獲物を探し、バッタやトカゲ、カエルなど獲物を捕らえると小枝やとげに刺す習性があり、これを「モズのハヤニエ」といいます。



18. アオサギ *Ardea cinerea* (留鳥)

日本最大のサギ。御陵の森などで、集団で巣を作り繁殖します。繁殖のころにはくちばしと足が赤くなります。作り物かと思うくらいじっとして動かないことがあります。



19. ジョウビタキ *Phoenicurus auroreus* (冬鳥)

スズメくらいの大きさ。冬鳥として渡ってきます。黒い翼に白い模様が紋付を着ているようで、すてきです。杭やフェンス、枝などに止まり、餌をとると元の場所に戻る習性があります。ヒッヒッヒッと甲高い声の後、カッカカッカと鳴くことがあります。渡ってくる頃になると、どこかでヒッヒッヒという声がかいていないか、いつの間にか聞き耳を立てています。



20. ヒヨドリ *Hypsipetes amaurotis* (留鳥)

ムクドリより大きく、尾が長い。飛ぶときは波形に飛んでいきます。木の実や昆虫を食べるが甘いものも好きで、ツバキ、サザンカ、サクラなどの蜜を吸い、サクラの花びらを食べることもあります。日本、朝鮮半島、中国の一部に棲息しています。ヒーヨヒーヨ、ヒーヒー、とかヒーヒュルヒュルヒーなどと甲高い声で鳴きます。大群でやってきて野菜を食べるので、あまり歓迎されていません。キジバトと同じく近年都会でも棲息するようになりました。





豊かな自然をささえる身近な野鳥 その2

多くの生き物が棲息する豊かな樹林に囲まれています。身近な野鳥はいつも私たちと一緒に生活しています。種子散布、花粉媒介、害虫等制御など私たちの生活に欠かすことのできない仲間ですが、姿を観察することはなかなかできません。気配を感じたり、^{きまぐ}囀りに季節を感じたり、癒され安らぎを覚えることがあります。そんな身近な野鳥を紹介します。

笹野 義一

野鳥は、一年を通してほぼ同じ地域に棲み、いつでも観ることのできる「留鳥」、春から初夏に南方から渡ってきて、多くは美しい囀りを聞かせてくれて、営巣・繁殖し、秋に温暖な越冬地へ渡っていく「夏鳥」、秋になると北方から越冬のために渡ってきて、春になると北方に渡って営巣・繁殖する「冬鳥」、春と秋の渡りの途中に日本に立ち寄る「旅鳥」に分類されます。野鳥を観察するときスズメ、ムクドリ、ハト、カラスの大きさを目安にするとわかりやすいです。

11. キビタキ *Ficedula narcissina* (夏鳥)

スズメよりすこし小さい。繁殖のため夏鳥として渡ってきます。山地の落葉広葉樹林や針広混交林に棲息します。

囀りを聴くと、ついつい聞きほれてしまいます。オスは黄色と黒の鮮やかな色彩をしているのですが、新緑に溶け込んで見つけにくく、自然の不思議を感じます。ようやく見つけたときは飛び上がるくらいうれしいです。



12. ホオジロ *Emberiza cioides* (留鳥)

スズメよりすこし大きい。鳴き声は「一筆啓上仕り候(いっぴつけいじょうつかまつりそうろう)」などと聞こえます。夏の暑い日、電線や梢で胸を張って大空に向かって朗々と囀っている姿には感動します。天敵に見つかる危険を冒して目立つところで囀っているのですから。よく似たカシラダカは冬鳥で短い冠羽があり、メスとオス(冬羽)には胸から脇に縦斑があります。



13. カルガモ *Anas zonorhyncha* (留鳥)

カラスより少し大きい。オスとメスは同じ色をしていて、どちらもくちばしの先は黄色、足はだいたい色です。川や池、田んぼなど水辺に一年中棲んでいて、数十羽の群れになることもあります。日本のカモの中で唯一の留鳥です。



14. キジバト *Streptopelia orientalis* (留鳥)

デデッポーポー、デデッポーポーと鳴きます。首の周りのきれいな鳩です。尾羽の先が白っぽいので、飛んでいる時も判ります。子どもはミルク(「ピジョンミルク」という)を与えて育てます。山鳩と呼ばれていましたが、近年都会でも棲息するようになってきました。



吉野川・紀の川流域の遺跡

その三〇

歴史に詳しい職員、成瀬匡章が、吉野川・紀の川流域の遺跡について紹介します。

「誰が築いた？ 広橋城」

下市町広橋は、月ヶ瀬・賀名生と並ぶ奈良県の三大梅林のひとつ広橋梅林で知られています。その広橋梅林の最高所、高峯稲荷神社が鎮座する「天守の森」と呼ばれる山頂に広橋城があります。

広橋城は「天守の森」を均して東西約60メートル・南北約25メートルの平坦面（主郭部）を造成し、その周囲に幅3〜4メートルの帯郭（帯状の平坦面）を削り出すことで、主郭部の周囲に高さ約3メートルの切岸（壁）を形成しています。さらに西側の帯郭の外側には、横堀と土塁を設けて守りを固めています。横堀はL字形に曲げられ、麓へ向けて口を開けています。麓からは虎口（入口）のように見えますが、袋小路となっており、周囲を土塁で囲んでいるので、入り込んだら簡単には出られないようになっています。西の尾根には神社に続く道が通っていますが、本来は堀切で遮断されていました。堀切は土塁で延長されており、西からの侵入を何としても阻もうとする強い意志が読み取れます。



図1 主郭部に鎮座する高峯稲荷神社

た技巧的な構造を持つ城は、奈良県南部では余り例が見られません。大名や有力国人が築いた城のようにも思えますが、当時、吉野郡の商業の中心地であった下市の町から離れているのが少し不自然です。

では誰が築いた城なのでしょう？

中世の吉野郡には八旗荘司と呼ばれた

有力者たちがいました。南朝を開いた後醍醐天皇（1288〜1339）が、吉野郡内の有力な八人の武士に旗を賜ったのがその由来とされています。天正六年（1578）、大和国の平定を目指す筒井順慶（1549〜1584）が吉野郡に侵攻した際、八旗荘司たちが、広橋城に籠城したという言い伝えもあります。

実際、広橋地区には、中世文書や甲冑（渡辺惣官家文書・奈良県指定文化財、広橋家腹巻その他…下市町指定文化財）が残されているので、付近に有力者が住んでいたのは間違いないさそうです。八旗荘司と呼ばれていた在地の有力武士の城と考えると良いのではないのでしょうか。



図2 広橋城縄張り図

参考文献
 下市町史編集委員会編 一九七三
 『天和下市史 続編』
 『広橋城』『図解 近畿の城郭Ⅲ』
 二〇一四 戎光祥出版



図3 主郭部西側の帯郭と切岸

中世の城跡は、下草に覆われていたり、倒木があつたりして、辿り着くまで一苦労するものが多いのですが、広橋城は下草が少なく、道も整備されているので、とても登りやすくなっています。

広橋梅林では、花の見ごろに合わせて「梅の里山まつり」が開催されているので、花見を兼ねて一度訪れてみてはいかがでしょうか。

川上村の巨樹・古木調査に寄せて

(横田岳人 龍谷大学理工学部、源流人会会員)

三之公林道の終点から水源地の森へ足を踏み入れ、台高の尾根に向かって沢を登っていくと、稜線に近づくにつれて風景が変わってくるのに気づく。植生が変化したのもあるのだが、周囲の木々がいつの間にか巨樹と呼べるようなサイズになっているからである。トガサワラをはじめとするそれらの木々は、遠目に見ても太くて樹高も高いし、近づいてみるとその大きさに圧倒される。それらの木々は水源地の森を長く見つめてきた守り神のような存在にも感じられ、足を踏み入れるのに畏れを感じさせるものでもある。さらに足を進めると、ゆったりしたブナ林の中にどっかりと腰を落ち着けた感のあるミズナラが谷を見下ろすように生え、村を見守っているように感じられた。

2018年3月に「川上村巨樹・古木調査 報告書」が発行された。上西由恵さんを中心に森と水の源流館のメンバーが協力して実地調査や聞き取りを進めてまとめたもので、現時点での川上村の巨樹リストとなっている。リストには、林業の村を代表するかのようになりすが目立つが、他にも地域の植生を代表するように、ウラジロガシ、ヤブツバキ、カゴノキ、クスノキといった常緑広葉樹や、エノキ、ムクノキ、ケヤキなどの落葉広葉樹、トガサワラ、モミ、ツガなどの岩角地に生える常緑針葉樹類、生活に関連する樹種としてトチノキ、オニグルミ、クワノキが名を連ねている。やや珍しいものとして、コウヨウザン、イチヨウといった渡来系の樹種やタラヨウ、イブキ、コウヤマキ、イチイ（アララギ）のように庭園に植えることが多い樹種も見られる。これらの多くは社寺林とその周辺に生育する樹木であり、森林内の巨樹は下多古の歴史の証人など数少ない。「木を隠すなら森へ」で巨樹が見つからない面もあるが、林業の盛んなこの村では、山の守り神としての木々は山行きさんに受け継がれ、山行きさんを見守っているのだろう。多くの人が知る巨樹として残されてきた樹木は、集落の中で大切にされて、結果的に集落付近に巨樹が集まっているのかもしれない。

奇岩や奇樹、巨樹・巨木といった自然物は神の依代として意識され、注連縄を巻いてこの世と切り離し神に属するものとして区別され、多くの地域で大切にされてきた。そのような「場」が信仰の対象として用いられ、社が建てられ神社になったものもあるだろう。しかし、自分たちが生活を営む空間に社寺を設け、その中に樹木を植え、その樹木を代々大切にし、集落を見守る存在として育ていく中で、巨樹・古木となっていった樹木もあるのでは無いかとも思う。京都市にある西本願寺には、本堂の前に大きなイチヨウが生育している。直径1m以上の巨木だが、横に大きく枝を分岐して樹高が低く、イチヨウにしては珍しい樹形をしている（京都市指定天然記念物）。イチヨウは中国原産の落葉高木で、西本願寺の地に自生していたわけではない。人が植えて守り育ててきたものが立派に育ち、その樹の前で手を合わせるような存在になっている。川上村の各在所に見られる巨樹・古木の多くも、このように人々が守り育ててきた樹木が多いのではないだろうか。1本1本の樹々には在所の人々の想いが詰まっており、まさに集落の守り神のような存在になっているのだろう。

多くの人の想いを集めた巨樹は、「祟り」という形で想いの一端をはき出すこともある。巨樹を傷つけたり伐採したりすると祟られるという話は、いろんな地域で聞くことができる。私が学生の頃に聞いた話では、京都から亀岡に向かう国道9号線沿いの右京区大枝にあった3本の大杉は国道の拡幅工事に伴って伐採されたが、拡幅工事終了までに3名の方が亡くなったとのこと。真偽の程を確かめてはいないが、祟りという形で巨樹の伐採を戒めているのかもしれない。

昨年末に滋賀県草津市の環境審議会は、10年以上貴重な樹木として保護樹木に指定していたムクロジの大木を、保護樹木指定を解除する答申を出した。江戸時代の東海道の枝道として使われた「矢橋の渡し」へ向かう街道沿いに生育していた樹木は、江戸時代中頃に植えられ地域の目印として親しまれてきた。だからこそ、草津市が保護樹木制度を制定した時にすぐに指定され、保護されてきた。しかし、昨年台風の影響で枝が折れた際に、周囲の住民の要請で全ての枝葉が切り取られ、丸太のような風情で立ち上がる姿に変えられてしまった。大量の落ち葉に悩まされ、台風のような大風の時に枝が落ちることを恐れる周囲の住民には、ムクロジの大木は迷惑な産物であり、早く片付けたい代物になってしまったようだ。同じ境内地には、保護樹に指定されていないムクロジや大木のクスノキの切り株が残っていた。

人が守り育ててきた地域の宝、目印、ランドマーク、大切な樹木は、地域の想いを受けて生きながらえ、巨樹として存在感を放ってきた。一方で、人々から忘れ去られ迷惑な存在になった巨樹は、様々な事情があるかもしれないが、人々にとってどうでも良いものになってしまい、地域から失われていく。地域の人々の心から巨樹が失われた時点で、巨樹のいのちは潰れているのかもしれない。

巨樹・古木は、その地域の心を反映する存在、地域の鏡といえるかもしれない。巨樹・古木のありようは、そのまま地域の今を物語る。どのような村を次の世代に伝えていくのか。先祖代々の村人の営みを知る巨樹・古木を仰ぎながら、その歴史に想いを馳せつつ、考えていこう。地域の巨樹・古木を大切に、次の世代に引き継いでいきたいと願う。

川上村の巨樹・古木は自然資源としてだけでなく、吉野林業の歴史や地域の文化を知るうえでも貴重なものです。しかし、高齢化や過疎化が進む中で、守り、伝えていくことは難しく、まずはこれらの木々と出会ってもらうべく、2018年9月8日（土）源流のつどい「川上村の巨樹めぐり」を実施し、県内外より11名の参加がありました。



前回に引き続き、人工林の間伐を少し体験していただき、源流人会の会員さんから15名の方が集まってくれました。

まず、これまでに伐採し、林内で乾燥させていたスギやヒノキうち、建材にならないもの、末(※)の部分などを適当な長さに小切って、土留めを設置し、林内歩道を整備し、足場の安全を確保してから木を伐っていきます。他にも根元の草や低木を刈り、伐倒方向と待避場所を見極めるなど気を配ります。

林業は危険な仕事という印象を持たれている方も多いのではないのでしょうか。これは間違いではありませんが、熟練の山行さんの仕事を拝見すると、経験が積み、技術を磨き、とても正確に作業されているとともに、周囲に大変気を付けていることが分かります。どの仕事も「安全第一」と「段取七分」、職員のヘルメットにも印字されています。今後事故の少ないよう森づくりを続けていきたいと思えます。

昼食の足しに「おかい(茶粥)」を準備

しました。吉野川源流のおいしい水とその水で育った米と茶、簡単な材料だからこそ、良し悪しが味に表れます。近畿地方に木枯らし一号が吹いた翌日、水がとても冷たく、出来上がるまでに時間がかかりましたが熱々のおかいは最高でした。またのご参加をお待ちしております。

私は生まれてからの18年間、大阪府に住んでいて、大自然にふれる機会がなく、初めて水源地の森ツアーに参加した時に感銘を受けました。

こんなにも緑にあふれ、植物・生き物が生き生きとしている姿を見て、私が学びたいものは、これだと確信しました。初めて目にした景色は今でもはつきりと頭に残っています。私が大学で森林科学を学ぼうと決意したのは、この奈良県川上村の水源地の森ツアーに参加したからだと自信を持って言えます。

高校3年生の6月、しかも高校の期末テスト目前という時期に、父から「7月1日、水源地の森ツアーに行く？」という誘いを受け、「テスト前なのに？」と思いつつも、自分自身「行かずに後悔するのはいやだ。」と思い、参加することにしました。そのとき、私はある大学

に参加することを決めました。そして、推薦入試当日、面接練習してきた通り、「私は高校3年生の7月に奈良県の川上村に行き、水源地の森ツアーに参加しました。その時に、原生林と人工林を見て、さわり、さらに森林について知りたいと思うようになりました。」と大きな声で言うことができました。そして、無事に第一志望大学に合格することができました。

私に、自然のすばらしさ、そして魅力を教えて下さった方々に感謝致します。そして、私はこれから大学で森林について思い存分学び、森林の良さ、そして必要性を説明できる人になろうと思えます。今私が書いているこの体験談が、「ほたり」に載せて頂ける頃には、私は大学生になり、期待に胸を膨らませ、大学生活を楽しみにしていると思えます。

水源地の森ツアーに参加して本当に良かったと思います。私の本当に学びたいことを見つけることができましたので、森と水の源流館の方々に感謝の気持ちで一杯です。ありがとうございました。

水源地の森ツアーに参加させて頂いて
平成30年12月8日記
大島 聡実

参加することを決めました。

推薦入試を受けるの推薦入試を受けようか悩んでいた時期でもあり、このツアーに参加したら、面接試験のときに、この経験を話せると思いい、



源流学の森づくり
11月23日(祝)



推薦入試を受けるの推薦入試を受けようか悩んでいた時期でもあり、このツアーに参加したら、面接試験のときに、この経験を話せると思いい、

源流人募集



源流人とは

かけがえのない水を生む源流の自然を愛し、源流を守り、育てる人です

源流人会とは

集い、話し、遊び、学び、考え、触れ、交流し、参加し、喜びを分かち合いながら、源流を守り、育ててゆこうとする会です

ともに源流学を楽しみ学ぶ仲間を紹介ください

個人	2,000円
家族	3,000円
学生	1,000円
団体	10,000円

年会費 郵便振替 00940-1-331163

水源地の森守募金

ありがとうございます。
平成29年度、243,317円の森守募金をお預かりしました。奈良県内すべてと、和歌山県内の紀の川流域市町村の小学4年生全員に配布した教材印刷費や源流域での斜面崩壊対策費用にあてさせていただきました。今後ともご支援をよろしくお願い致します。



郵便振替 00950-2-331164 「水源地の森守募金」あて